

よしみ  
吉川芳富さん（黒滝）

北村ますえさん（永田）

病気がちの奥さんを介護しながら、以前花が好きな奥さんが行っていた、花作りを引き継いで続けている吉川さんです。



昔は働きに出ていましたが、妻を一人残しておきたくなかったし、花さえ見たいならよいという妻といっしょに花を作るようになりました。休みなしですから忙しいです。でも、

いろいろな発見があつて面白いですよ。花に教えられながら、試行錯誤を繰り返す毎日ですね。拾ってきた木の根など自然のものを使って、置き物を作るのが息抜きです。



短歌、俳句の地にも書道、日本画、水墨画など多趣味な北村さん。オールドバウー文化展で賞を

いくつかもらったり、自費出版で自作の句集を作ったりと、精力的に創作活動を続けています。

体を悪くして仕事ができなくなったとき、何かやりたいと思ひ短歌を始めました。その後書道や俳句、日本画なども始めましたが、自己流なんでもうまくなくて。よく友達ご手作りの冊子ももらいます。お返しにと思つて自作の句に水墨画をつけた冊子を作りました。まだまだ未熟なので練習をつんで、納得のいく物が作れるようになりたいですね。

## 戦後の解放運動

前月で、戦後の同和教育の歩みは、一応終了して、今月から戦後の解放運動について、その概要を述べます。

戦後の混乱は、日本中どこでも同じようなものでしたが、とりわけ被差別部落では、戦前から大都市へ転出していた多数の人口が被災で焼けだされて、出身地の被差別部落へ帰ってききました。

この中には、大都市で地区外の男性と結婚した部落出身の女性で、夫や子どもをつれて、生まれ故郷の被差別部落へ縁故を頼って帰ってきた人も大勢おりましたので、その混乱は一層ひどいものでした。「住むに家なく、食べるに職なし」といった状態でした。

こんな状況の中で、戦前の水平社運動をひきついだ組織として、一九四六（昭和二一）年二月に「部落解放全国委員会」が結成されました。

部落解放委員会という名称にしたのは、高松差別裁判で

戦後の解放運動、部落行政がどのように行われたか

成果をあげた、部落解放委員会の経験から、多付けられたものです。

高知県でも、この年の八月に、高知市小高坂の八幡宮に有志が集まり、委員長に森岡深大、書記に西本利喜・藤沢喜郎を選んで「部落解放高知

## 同和教育シリーズ

県委員会」を設立しました。その夜、香美郡赤岡町で、本部委員長、松本治一郎を迎えて、第一声をあげ、戦後の解放運動

がはじまりました。その後、部落解放高知県委員会は、県下各地の組織づくりに全力をあげて取り組みましたが、その中心になって活動したのは、各地の青年連でした。

その組織の一つであった嶺北の青年たちは、「集会所の設置」「地場産業の育成」「仕事をよこせ」の要求をかけた。町村の行政者と再三に

わたって交渉をもちました。さらに、一九四七（昭和二二）年の地方選挙では、各地で議会に代表者を送る運動をすすめる、成果をあげました。議席を持った指導者達と共に、各地で要求運動が活発に行われました。

各地の自治体でも、部落の人々の窮状を放置できなくなり、市町村単位で、失業対策事業を導入し、仕事がなく困っている人々（地区外の人も含む）を、この事業の日雇労働者として、就労させました。

この事業の導入によって、最低の生活はできるようなったものの、日給一六七円の低賃金では、とても暮らさしは成り立たない状況でしたが、部落解放高知県委員会は、この人達の組織をつくり、市町村や県との交渉をたびたび行い、就労条件の改善や「年末のモチ代よこせ」運動等をすすめる、次第に部落の人々の心を動かしていきました。